

序に代えて

## 仏教の目指すもの

—— 苦悩を超える道 ——

一 郷正道

## 仏教への誤解

現在の一部寺院・仏閣の光景から、仏教は現世利益を求める祈願、卜占の手段、教えであるかの如き印象をもっている人が意外に多いように思えてならない。その誤解を払拭するため、まず釋尊の出家の理由を確認することから始めたい。

## 釋尊の出家

釋尊の出家については、私的、社会的視点からさまざまな理由が推測されており、唯一特定のものに絞ることは正しくないかもしれない。一弱小国家とはいえ、ときの行政長官を父にもち、全く不自由を感じることのない贅をつくした生活をしておられた釋尊が、二十九才にして突如出家なさった事実を目を向けることよって仏教の目指すものを理解することが大事かと思う。主要な出家理由を検討するとき伝聞されるものに四門出遊のエピソードがある。

あるとき、釋尊は馭者を伴い城外へ出た。東門から出ると普段城内では目にすることのなかった得体が知れない人物に出会った。あれは何者かと馭者に問う。馭者は、あれは老人でございませと答える。自分もあのようなようになるのかと問えば、釋尊も人間でありますからやがてあのような姿になります、との答えがもどってくる。以下、南門から出たときには病人に、西門から出たときには死人に出会う。北門から出たときに、これまた、これまた見たことのない出家の沙門に出会った。その澄んだまなざし、凜とした端麗な容姿に感

仏教の目指すもの

動された、と伝えられる。仏伝を繙くときかならずといっていいほど登場するこのエピソードは、老病死という根元的な人間苦と対比させて最後に出家の沙門との出会いを挿入し、人間苦を超克する道として出家の沙門になることが暗示されていて巧みな構成といえよう。

それでは、釋尊は何故何不自由のない生活から敢えて苦難の出家の道を決断したのだろうか、資料に依って理解したい。

「比丘たちよ、なんじら出家したる者は、髪を剃り、鉢を持して、家々に乞食をして生を支える。乞食とは、世のもろもろの活命（生活の仕方）のなかの下端である。だが比丘たちよ、もろもろの秀抜なる人々が、かくの如き生活に就く所以のものは、義（ただ）しき目的の存するによりてである。王に強いられたるにあらざ、賊に強いられたるにあらざ、負債のゆえにあらざ、活命に窮したるにあらざ。われらは、苦に陥り、苦に沈み、苦に囲まれてある。されば、われらはこの苦の集積をのぞきつくさんとして、ここにいたれるのである。」

〔相應部 二二、八〇「乞食」こじき〕

釋尊の出家の理由が「苦の集積をのぞくため」、すなわち苦からの解放にあったことがこの資料から歴然としている。

## 苦とは

それでは、苦とは何か。古来、四苦八苦といわれる。生・老・病・死の四苦と愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦の三苦、それら具体的な七苦と、七苦を総合する形で第八番目に五蘊盛苦が挙げられている。五蘊とは、五つの要素、かたよりの意味がある。いろ・かたち(色)、感受作用(受)、想念(想)、意欲(行)、認識(識)の五つである。いろ・かたちが物質的な要素であり、他の四はいずれも精神的要素といえる。そして、これら五要素から構成されるのが人間である、というのが仏教の人間観である。

したがって、人間存在そのものが苦であり、「人生は苦なり」という表現が生まれるわけである。これら具体的な七苦以上に付加すべき苦があるであろうか。見事な人間苦の分析に感嘆せざるを得ない。

そのうち、最も深刻な苦はなんであろうか。死苦であると愚考する。突如やってくる死

仏教の目指すもの

に対する不安と恐怖、誰も代わってあげれないし代わってももらえない死苦、死という未知の世界に対する不安と恐怖、現に身近なものが死去して生ずる悲しみ、淋しさ等の感情を思つてのことである。

死苦が最大の苦であれば、死苦からの解放こそ最大の楽であり、最大の苦・楽についての解放・獲得を教えて下さったのが釋尊であつたと言えよう。死苦の問題を避けようとし、死について語ろうとしない教えは、仏教とはいえない似非仏教と断じることができ

る。さらに、苦について確認しておかなければならないことがある。苦は、非実体的なものであり、相対的なものであり、主観的なものでしかない、ということである。そのことは次の一文が明言しているといえよう。

「好き勝手に生きてきて申し訳ない私なのに、突然の死を賜ることなく、自分の生き方や死を問わずにはいられない、ガンという病気を賜ったことを感謝しております。」

(鈴木章子『癌告知のあとで』)

ガンを死刑の宣告としてしか聞けない人もいれば、感謝の対象として引受けられる人もいるのである。

「苦が主観的なもの」ということは、私の思い通りにならないこと、私にとって不都合、不条理なものを苦と表現しているにすぎない。そうであれば、苦は、私成ずるものであり、私が作り出しているにすぎないものといえよう。従って、他人の苦悩は代わってあげられないし、頒ちあうことしかできないわけである。

これは、ちょうど節分の際「鬼は外、福は内」と言って豆まきをする、「鬼」と同じことである。鬼などどこにもいない。私にとって不都合なものがみな鬼にされてしまう。つまり、私が鬼をつくり出しているのである。逆説すれば、実在もしない鬼をいつも作り出している私こそ、鬼の存在といえよう。

老・病・死という根本的な人間苦を科学的に克服しようと努めるのが医療であり、一方それらを引受けていこうとするのが仏教であるともいえよう。医科学的に治療したからといって精神的には根治しえないであろうから、その先をも引受けていくのが仏教であろう。死の問題を先送りする、隠してしまう、タブー視するといった態度は、非仏教的といえよう。私たちは、つねに死と直面していかねばならないのである。「生死不二」「生死一

仏教の目指すもの

如」という言葉が示すように、生と死は、紙の表裏の如き存在であり、死にうらづけられて生があるのである。それを生と死は別、生が終了して死がやってくると思っているのは間違いである。私たちは、正しくは「日々、死につつある存在」である。そのようには認めたくないの、表現を「生きている」と言っているにすぎない。であれば、本当に「生きています」と言えるような生活をしなくてはならない。

## 苦の原因

それでは、何故「人生は苦」なのであろうか。何故、思い通りにならないのであろうか。

答えは、「生かされて存在している私だから」「条件づけられてしか生きていけない私だから」である。普段、私たちは、自分の意志で、自分の能力で、私が努力しているからこそに存在している、と思っている。それは誤解であり錯覚ではないことに気づかねばならない。「生かされている私」を発見する手がかりを考えてみたい。

## 真実の私

あらためて「私のいのち」という表現を通して確認しておきたい。「私のいのち」と所  
有格で呼んでいるが、本当にこのいのちは私のものであるうか。私のいのちの長さ、内容  
を私が自由自在にコントロールできるものであるならば、私のいのちと言えるであろう  
が、現実には全く私の指令の及ばないものなのである。

(1)それは、まず、いのちそのものが賜りものであるからであろう。

私のいのちのルーツを辿れば無限の過去に遡るし、無限の未来に継承される。現代の生  
物科学はヒトの祖先はチンパンジーとしている。鎌倉時代の親鸞聖人の見解は正しい。

一切の有情は、みなもって世々生々の父母兄弟なり。

〔歎異抄〕 第五条

仏教の目指すもの

「有情」を人間だけとせず動植物を含めて定義するところに仏教のすばらしさがある。さらにこの聖人の見解は、インドの釋尊に、四世紀の高僧アサンガ（無着）にもすでに見られる。

あらゆる有情は輪廻のなかにあつてたがいの親族であつた。

（相応部經典Ⅱ 取意）

一切の有情は無始よりこのかた生死を遍歴し長時にわたり流転するとき、互いに父、母、兄弟、姉妹、師、高貴で権勢の人に、ならないことはない。かかる因縁によつて、一切の敵はみなわが友人だといえる。

（無着、『瑜伽師地論』声聞地 取意）

このように、私たちのいのちは、生まれ変わり死に変わりしてきた歴史の流れの中において賜ることのできたものである。八〇年といった現世でのいのちだけを「私のいのち」という発想を改めるべきである。相田みつをさんの詩がわかりやすく説いている。

## 過去無量の

いのちのバトンをうけついで / いまここに / 自分の番を生きている /  
それが / あなたのいのちです / それが / わたしのいのちです

(相田みつを『いのちのバトン』角川文庫)

(2)また、「私のいのち」といえども、本来、私物化、私有化できないものであることを思い起こすべきであろう。

私が今、ここに、生きていると実感するのは、心臓の鼓動、脈はくを聞くときである。これらは私にとっての生命の中樞機能である。私の心臓の鼓動であり、私の脈はくである。しかし、私はこれらの機能を全くコントロールできない。鼓動させようと思っても鼓動させることはできないし、長年はたらいてくれているから少し休ませてやりたいと思っても休ませることはできない、そんなところに維持されているいのちを「私のもの」と言えるであろうか。

一分間に六十五 / きちん きちん と / 休まず とまらず /

仏教の目指すもの

うちつづけ 六十余年

あと何年か 何日か／眠っておっても／ぐちっておっても

休まず とまらず

(宇野正一「脈はく」柏樹社)

(3) それでは、この「私のいのち」をどのようなものとして受けとめたいのであろうか。「支えられている、生かされている私」の発見である。

「支えられてわたしが」 東井義雄

ざしきにあがればざしきが／ろうかに出ればろうかが

便所に行けば便所のゆかが／どこへ行っても／どこへ行っても

わたしを支えていてくれるものがある

そればかりではない／妻も子どもも孫も／有縁無縁の人々も／

生きとし生けるもののいのちたちも／石も土も火も空気も／

わたしを支えておってください

ああそればかりじゃない／忘れづめのわたしを支えづめに／  
久遠の願いがわたしを／支えていてくださる

『本願寺新報』二〇〇〇年四月

ある日、玄関先に現れた女子中学生は、見るからに落ち込んだ様子でした。「死にたいって、君のどこが言っているんだい。ここかい？」と頭を指すと、こくりとうなづきます。私はとっさに言葉をついでいました。でも、君が死ねば頭だけじゃなく、その手も足もぜんぶ死ぬ。まず手をひらいて相談しなきゃ。君はふだんは見えない足の裏で支えられて立っている。足の裏をよく洗って相談してみなさい。

数ヶ月後、彼女からの手紙には大きく足の裏の線が描かれ、「足の裏の声が聞こえてくるまで、歩くことにしました」と書かれてありました。

思えば真史が最後までこだわった「じぶんじしん」とは、足の裏で支えられた自分

仏教の目指すもの

ではなかった。そのことに気づかせてあげていけば……。

(高 史明『朝日新聞』二〇〇六年二月二日)

太陽、水、空気、大地。生物も無生物も、目に見えるもののみならず目に見えないものをふくむ一切のものによって生かしていただいているのが、この私という存在である。一切のものが、この一介の私のいのちを生かそうとして働いていてくれるのである。

私たちは、普段、これが欲しいあれが欲しいと願ってばかりいるが、私たちは願われた存在でもあるのである。両親から、健康に注意なさいよ、友人と仲違いしてはいけないよ、物を大事にしなさいよ等々、耳に聒たごがこができるほど聞かされてきた。しかし、それは一つの期待であり願いであろう。両親は祖父父母から、さらに曾祖父母から、辿っていけば久遠の昔からかけられてきた願いであったのである。それによって、私は人の道にそむくことなくこれまで生かしていただいているのではないであろうか。

## 具体的な生き方——智慧と感謝

「一切のものに生かされている私」の発見は、一切のものに条件づけられている存在であることの発見に他ならない。条件づけられているということは、制約されていることにほかならない。そうであれば、私は、もともと不自由な存在なのであって、思い通りにならなくて当たり前なのである。

思い通りにならないから苦と受けとめるか、苦であることを真実の発見と受けとめるかは個々の問題である。思い通りにならなくて当然だとわが身の真実の姿に目覚めれば、あるがままの姿でいいのだ、と肩肘張らずに生きることができるようになる。この、制約された存在であり思い通りにならない存在、即ち縁起的存在だと自分に気づくこと、これこそ仏教の智慧であろう。この智慧は、素性、容姿、学歴、経済力等とは関係なく、誰にも可能な目覚めであり、誰もが覚者（ブツダ buddha）になり得ることを教えていることに他ならない。

この智慧に目覚めれば、「おまかせ」という生き方と「感謝」という感情、生き方が出

仏教の目指すもの

てくるはずである。この私を制約している、この私一人を生かしつづけて働いてくれるすべてのものに、「すべてのもののおかげで」という感謝の情が出て当然といえるであろう。そんな生き方を象徴的に示す言葉を「お天道さま」という表現に見ることができるとであろう。太陽に尊敬の意味を表わす「お」をつけ、「さま」と呼ぶのである。

——二〇一三年三月——